

堺市・羽曳野市・藤井寺市
3市議会合同議員研修会
平成28年11月22日

研 修 会 記 録

講 師

文化のみち代表・堺都市政策研究所理事

足 立 久美子 氏

堺 市 議 会

羽 曳 野 市 議 会

藤 井 寺 市 議 会

○午後 3 時開会

○松村尚子羽曳野市議会議員 それでは皆様、大変長らくお待たせいたしました。改めましてこんにちは。ただいまより堺市、羽曳野市、藤井寺市の 3 市議会合同議員研修会を開会させていただきます。

本日は大変御多忙中にもかかわらず、この合同議員研修会に多数御出席をいただきましてありがとうございます。

私は、本日の研修会の司会を務めさせていただきます羽曳野市議会の松村でございます。行き届かない点、多々あるかと存じますが、どうぞ最後までよろしく願いを申し上げます。

(拍手)

さて、それでは本日の研修会は、百舌鳥・古市古墳群の世界文化遺産登録につきまして、その意義やさまざまな課題等に関する共通認識を持ち、3 市議会における議論の深化を図ることを目的として開催するものでございます。

このたび、文化のみち代表・堺都市政策研究所理事であります足立久美子様に研修会の講師をお願いいたしましたところ、公私御多忙にもかかわらず、快くお引き受けをいただきましたこと、心から感謝を申し上げますとともに、深く敬意を表させていただきます。ありがとうございます。

それでは、皆様方におかれましては本研修会への参加が有意義なものとなりますように期待いたしております。

それでは、初めに主催者を代表いたしまして、吉川堺市議会議員より御挨拶を申し上げます。吉川議長、よろしくお願いいたします。

○吉川守堺市議会議員 どうも皆さん、改めましてこんにちは。御紹介をいただきました吉川守でございます。

本日はお忙しい中、世界文化遺産登録に向かつてのこの研修会ということでございます。3 市議会合同議員研修会に御出席をいただきまして心より感謝を申し上げたいと思います。ここに堺市、そして羽曳野市、藤井寺市、3 市議会の議員の皆様方が多数御出席をいただきましたことを大変うれしく思います。本日はどうぞよろしく願いを申し上げたいと思います。

また、本日研修をいただきます足立久美子先生、あるところで私の先輩に当たりました。先ほどお話をさせていただいて話が盛り上がったというところでございますけども、何かと御多忙中、快く講師をお引き受けいただきまして心より感謝を申し上げます。どうぞよろしく願いを申し上げます。

さて、皆様も御存じのとおり、今年度の国内推薦には「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が選定をされてしまいました。我々の「百舌鳥・古市古墳群」は平成 30 年度の世界文化遺産登録をめざす国内候補からは惜しくも漏れてしまったわけでございます。

しかしながら、国内推薦に向けて今年度、文化庁から古墳の大きさや形で示した階層性のわかりやすい説明など、5項目について課題として示されるなど、やるべき課題が明確になったということでございます。来年こそは国内推薦を勝ち取って世界遺産登録を必ず実現するぞという思いを込めて、3市議会においても引き続き連携をとりながら取り組みを進めてまいりたいと思いますので、よろしく願い申し上げます。

本日の研修会では足立先生より、「今だから考えたい歴史・文化とのつきあい方～歴史・文化遺産の継承のあり方とは、地域との関わり方とは～」と題しまして研修の講師をお願いしているわけでございますけれども、この研修会を契機に、いま一度、世界文化遺産登録をめざす意義を確認をし、機運を高めていくことにつなげていければと、このように思っているところでございます。

皆様方におかれましては、研修会の中で御発言などもいただきながら、この研修会がより有意義なものとなりますようお願いを申し上げたいと思います。

簡単ではございますけれども、冒頭の御挨拶とさせていただきたいと思います。本日はどうぞよろしく願いいたします。（拍手）

○松村尚子羽曳野市議会議員 吉川議長、どうもありがとうございました。

それでは、研修会に移らせていただきたいと思います。

それでは、本日の講師であります足立久美子様を御紹介させていただきたいと思います。

足立久美子様は、京都府宇治市生まれ、大阪市立大学大学院創造都市研究科修了後、北陸放送株式会社報道制作局、公益社団法人奈良まちづくりセンターを経て、1996年より歴史街道推進協議会で歴史・文化を基盤にした地域づくり、文化発信、観光等の各種事業に取り組まれてきました。

また、文化庁文化審議会専門委員、世界遺産「飛鳥・藤原」登録推進協議会専門委員、九州国立博物館「次の10年を考える懇話会」委員などを歴任され、現在は公益財団法人堺都市政策研究所理事を務められるとともに、有志で組織した「文化のみち」におきまして、次の時代の文化の担い手育成をめざした新しい学びの場の創造・実践、文化の発展・継承のあり方を考える調査・研究活動を行っておられます。

本日は「今だから考えたい歴史・文化とのつきあい方～歴史・文化遺産の継承のあり方とは、地域との関わり方とは～」と題して研修をいただきます。

それでは、足立様、よろしく願いいたします。

○足立講師 どうも、皆様、はじめまして、こんにちは。（拍手）

今御紹介していただきました足立と申します。ここに座ってというのが本当に私は苦手なので、ちょっと動き回るといことをさせていただきたいと思います。

さっき吉川さんから言われましたけど、私は創造都市研究科の第1期生で、すごい先輩ということになるんですけども、今御紹介いただきましたように、職場は3つかわっているんです、放送局をやり、それからまちづくりのNPOに入り、それから広域で関西の歴史・文化というのを国内外に発信していくというふうなことでやってるんですけども、ただ、歴史とか文化とかかわるといことは、気がつけばずっと一貫しておりまして、三十数年、ずっとやっているということ、もう年はばればれだとは思いますが、すごく自分としてよかったなと思いますのは、やはりこれからちょっとお話もさせていただきますけど、歴史・文化とかかわるまちづくりの黎明期、初めころからずっと何らかの形でかわることができたということと、それから、民間企業、放送局ですよね、民間企業を経験し、それからNPOですから草の根的なものを経験し、そして、公益団体でしたので行政、行政の場合も国、府県、市町村という、ありとあらゆるレベルのもの、それからもちろん草の根の方々もそうでしたし、研究機関も、それから企業のほうも大企業、中小企業あわせていろんな方々と連携しながら物事を進めていくということを経験させていただいたということで、私のキャリアとしてはそれが非常に大きな意味があるなと、今しみじみと思っています。

そういうことを経た中で、きょうのこのお話になるんですけども、実はこれのお話をいただいたときには、歴史・文化遺産の継承のあり方と地域とのかかわり方についてというようなかたいテーマをいただいたんです。それは多分、皆様、議員さんでいらっしゃるもので、いつも向き合ってるしゃる問題だなと思うんです。なぜそれをつきあい方にしたかという、これがきょうの研修会の特徴なんですけれども、一緒に考えていくという、そういう場にここはしたいなというふうにしたんです。一緒に考える、それを私は創造的対話の場というふうには思っています。

例えば皆さん、議員さんでしたらいろんなことを議論していくという場が多いと思います。議論といいますと論点が幾つかありまして、それを収れんさせていって、どこに落としどころを求めていくかということ、ある程度、結論みたいなものを想定しながらやっていくことが多いと思います。それから、あるいはディベートですね、対戦的にやっていくことが多いと思います。そういうのも1つあるんですけども、対話というのはむしろそのプロセス、いかに自分は何を考えてるんだろうというふうには自分自身に問いかけながら、そのプロセスを味わい深めていくという、そこで何を築いていくかということのほうが大切な部分なので、きょうはその対話というふうなことを通して一緒に考えていきたいなというふうには思ってます。

そのときのじゃあ対話の主体はというところで、これは当たり前かもしれませんが、

皆さん、一人一人であるというふうに思っていたきたいんですね。当たり前やんと思われ
るかもしれないんですけど、多分皆さんは議員さんですから、議員さんのお立場でいろんな
ことを考えておられると思うんですよね。ちょっときょうはその部分を括弧に入れまして、
個人に戻っていただきたいと思います。こういう場というのはめったに余りないと思うん
です。なので、この研修会はあえてそういうことをしていけたらなというふうに思ってます
ので、ちょっと議員ということを含弧に入れるということを意識してみてください。

もう一つは、その創造的対話ということなんですけれども、対話する相手は多分皆さん方
はふだんは有権者の方々の声を耳を澄まして聞きながら、何を考えておられるだろうとい
うことを一生懸命やっておられると思うんですが、きょうの対話の一番の相手は自分自身
です。自分に問いかけ、自分で答える、何か禅の世界のようなんですけれども、これをやっ
ていただけたらなというふうに思っています。自分自身が一体どんなことを歴史・文化
に対して考えているのか、どんなことを問題として思ってるのか、どういうことを思
いとして持っているのか、そういったことを一緒に考えていける、そういう場にしてい
けたらなというふうに思っています。

きょうは皆さん、筆記用具はお持ちですよ、もう書いていただいていますから。です
ので、ちょっと何回か質問を投げかけたりしますので、実際に短い言葉、長い文章で
なくて、短い言葉でちょっと書いていただくという、そういう作業なども取り入れな
がら進めていきたいなというふうに思っておりますので、よろしく願いいたします。

流れといたしましては、まず一緒に考えていただくためのきっかけになるような話題を
提供しながら、ちょっとやりとりをしていって、そういったことを通じまして、皆
さんに問いかけながら、私自身、日ごろ考えてることも含めまして、いろいろと考
えを進めて、対話を進めていけたらなというふうに思ってるわけなんですけれども。

じゃあ、ちょっと最初にウォーミングアップも兼ねまして、皆さんに問いかけ、その
1です。歴史・文化と言われてイメージ、ぱっとされる言葉を書いてみてください、ぱ
っと浮かんだ言葉です、自分としてですよ、自分がぱっと、歴史・文化と言われて
ぱっとイメージする言葉。難しい言葉ではなくて結構です。本当に簡単にふっと思
ったこと、これかなというふうに思われた言葉を書いていただけたらなと思いま
す。改めて自分に問いかけられるなんということ余りないので、結構、えっと思
われる方、あると思うんです。これ、よく私、いろんな集まりでやるんですけ
ど、えっ、ちょっと待ってと言う方、結構多かったり何かするんですけれど
も、ぱっと浮かんだ言葉です。

じゃあ、よろしいですか。

○吉川守堺市議会議長 仁徳御陵と書きました。

○足立講師 仁徳御陵、そのもので来ましたね、そうですか、仁徳御陵。

ほかにございますでしょうかね、どうですか。

○岡本光藤井寺市議会議員 私、道明寺と書きました。尼寺の前に住んでるもんですから、お寺の真ん前に住んでるもんですから。

○足立講師 なるほど。じゃあもう本当に身近なおつき合いをされてるとい、普通の文化財とか、そういうのじゃなくておつき合い、隣近所のおつき合いですね。

どうですか。

○木畑匡堺市議会議員 京都。

○足立講師 京都。何でまた。

○木畑匡堺市議会議員 いやいや、ぱっと歴史・文化って京都です。

○足立講師 そうです、そうです。

○木畑匡堺市議会議員 侍とか、城とか。

○足立講師 なるほどね、やっぱりそういうふうな。

ほか、何かありますかね、何かさっきからうんという感じで、みんな。

○中路新平藤井寺市議会議員 人類が歩んできた足跡。

○足立講師 足跡ね、人類、私たち一人一人にかかわるといこと。

どうですか。

○的場慎一堺市議会議員 ロマン。

○足立講師 ロマン、格好いい。

○的場慎一堺市議会議員 格好いいでしょう。

○足立講師 どういう、お好きなんですか、歴史。

○的場慎一堺市議会議員 いや、何となく。

○足立講師 何となく。ロマン、何かあれですか、一番ロマンを感じる場所とかと言ったらどこですか。

○的場慎一堺市議会議員 やっぱり大阪城ですかね。

○足立講師 大阪城、なるほど、真田ですかね、真田丸ですかね。何か堺とか、藤井寺とか、羽曳野とかは出ないようなんですけど。でも、何か皆さんの大体イメージ、ぱっと浮かぶのは、ロマンというような、そういったものですか、具体的なものであるとか、もうお隣近所のお寺がどんと出てきたといこととかあると思うんですけども、いろんなイメージがもっと本当は出てくるのかもしれないけど、大体そういう、京都とか、侍とか、そういうふうな感じになっていくなという感じはするんですけども。

そのイメージが具体的にどういことなのかといことをちょっとちょっと考えながらといことで、きょうその一緒に考えたいポイントなんですけれども、歴史・文化、その歴史の今、自分が一体どういところに立ってるかといのを自覚、確認してもらいとい、その本当に真田丸からとか、もう仁徳天皇陵とか、とんでもない距離の中で、でも自分は歩んでる、さっき人類の足跡って、歩んできた足跡といお言葉がありましたけれども、ただ、

何となくそういうものを本当に実感できるかということ、ううんというのもあると思うんですよ。それを余り遠い歴史ですとわかりにくいので、ちょっと近いところからいろいろ考えながら、自分が今どういう立ち位置に歴史・文化というものと向き合ってるのかなどいうのを確認してもらおうということと。

ちょっと、もうちょっと深めてもらう歴史・文化に対する考え方を。そういう物の見方とかを、何で自分はそうしてるのやろなということ、これもちょっと確認してもらいたいなというふうに思います。ぱっと浮かんだら、京都でしょう、侍でしょうと思われるというのは、それも1つの歴史・文化というものに対する何か物の見方がかかわってるのかもしれないですよ。そういうものをちょっと探してもらおう。

それから、自分が一体どんな問題意識を持ってるのか、大上段に世界遺産登録と言うのは何かすごく一足飛びも二足飛びも三足飛びもしてるような感じなんです。その身近にある、目の前にあるものに対して、お寺さんに対しての思いと、それがいきなり世界遺産となると、すごく遠いという感じもしますよね。そういうものをもうちょっと距離感を持って考えていくときに自分自身のやっぱり捉え方といいますかね、問題関心のあり方みたいなものをちょっと確認していただくという、そういうふうなことをポイントとして共有していきたいなというふうに思っています。

一言で歴史・文化を生かした例えばまちづくり、きょうはちょっと戦後から現在に至るまで、その歴史・文化を生かしたまちづくりという視点、観点から、その時代をちょっと見ていってきたいなと。歴史・文化というものが、その時代、時代でどんなふうを受け取られてきたのかなと。

さっき三十数年、何となくかかわってますと言いましたけども、今、歴史・文化を生かしたまちづくり、それから世界遺産登録をめざしてなんて言うと、みんな何となく暗黙のうちにうんうんということになると思いますけれども、三十数年前、そんなことはありませんでした。歴史・文化、何やそんなもんというような、まだ時代でした。まちづくり、そんなもん、お金のある人が勝手にやらはったらええやんかという、そんな時代でした。それが今では行政の総合計画には必ず出てくるようになっていきます。それだけ、たったこの三十数年見ても価値観が変わってきているんですよ。皆さんはそういう中で歴史・文化と知らないうちに向き合ってきたということで、さっきの確認ですね、自分は一体どんな時代に今あるのか。それから、それに対してどういう物の見方をしているのか、問題関心としてどんなものを持っているのか、それを確認しながらちょっとお話をとっております。

さっきから、そのまちづくりというふうに申し上げてるんですけども、すっかり行政用語になりましたけれども、これは実は戦後復興期、戦争に敗れて、それから日本は復興せねばならないということで各地で地域づくりが行われていくわけです。地域づくりというか、もう瓦れきの山ですよ、それを何とか都市に整備していくとかいう中で実は生まれた言葉

なんです。ですから、行政用語でも何でもなく、運動の中から湧き出てきた言葉だというふうに言われています。諸説はたくさんあるんですけども、一番有力なのは名古屋の大復興計画です。そのところで官が主体に進めます、国が主体に進めますので、やっぱりもう戦争に負けまして、軍事力というのは放棄します、戦争放棄ということで憲法で決まっていますから。じゃあ、何で強くなっていくのか、何で世界に打って出るのかということで、日本は経済というものを選びました。経済でやっていくということで、だから、まちも経済に強いまちをつくらうということで、大きい道路をばんと通して物流がうまくいくようにしたり、工場をどんどん誘致したりというような方向に行くわけですけども、そういう地域づくり、復興計画がつくられて、地域づくりが進められていくわけです。

そういう中で、ある名古屋の方々が、本当にこれでいいのかと。自分たちのここにあったコミュニティみたいなものが全部潰されていく、新しい日本をつくるというけれども、全部今まであった人の暮らし、生活、それから伝統や文化といったもの、そういったものも全部ブルドーザーでがっと押しやって全く新しいものをつくるって、本当にこれでいいんだろうかという問題が沸き上がります。やっぱり自分たちのまちは自分たちでつくるんだという、そういう思いの方々がやっぱり口々に自分たちのまちは自分たちでつくる、まちをつくる、まちづくり、まちづくりということで声を上げていかれるのが全国的に飛び火していったんですよね。これはもう今のようなインターネットも何もない、ツイッターでどうのこうのも何もない、そういう時代ですよ、そういう時代にその思いが言葉に乗って伝わって行って、まちづくりという言葉ができたというふうに聞いてます。それがだんだんと皆さんの中に浸透するようになって、それから戦後71年目には行政の政策項目にばんと出る、まちづくり推進課なんて当たり前のようにありますけれども、決してそうではなかったという、そういう言葉なんです。

歴史・文化を生かしたまちづくりも、実は官主導とか、そんなんではなくて、草の根という動きの中から沸々と沸き上がっていくわけなんですけれども、その戦後復興期から日本というのは経済に強い国をつくりましょうということで、1960年には国民所得倍増計画というのが出てくるとかで、もうひたすら高度成長期をひた走るわけですよ。1956年ですから、もはや戦後ではないというふうなことを言われてから、もうますます加速度を増していくわけなんですけれども、地域づくりもさっき申しましたように経済に強い都市基盤というものをつくらうと。それはもう首都圏中心の都市部であっても、それから地方であっても一緒だし、ちょうど1962年ですか、全国総合開発計画、聞き覚えのある方もいらっしゃるかもしれませんが、というのができまして、地域の均衡ある発展、その当時、高度成長期、60年代というのは全国どこでも同じであるということが平等ですばらしいことなんだという価値観です。ですから、一番わかりやすいのは新幹線の駅です。大体おけると同じような雰囲気になんてなっています。ああいうものがやっぱり均衡ある発展の土台と

なるんだということでどんどんどんどんつくられていくわけですよ。

ずっとそのようにやってきて、1970年、大阪万博なんていうのもあって、人類の進歩と調和みたいなことをテーマにやっていったりとか、それから田中角栄さんがちょうど1972年、日本列島改造論というのをつくって、やっぱり地方と、それから東京との格差とかね、そういったものをなくそうとか、太平洋側と日本海側の格差をなくしていこうというふうな、そういう動きがますます強くなってきているというふうな中で、それが60年代、70年代の前半ぐらいまでの話なんですけれども。

けれども、やはり高度成長の光があれば影もあるということで、このころから言われ始めてたのが、やっぱりそういう経済優先でどんどんどんどん効率的に進めていく、これで本当にいいのだろうかという動きが出てきます。それはどういう形で出てくるかというと、このころ、同時に公害問題というのでも出てきます。このあたりでもやっぱりいろんなスモッグが出て大変とか、ぜんそくが出て大変というふうなことがあったとも聞きますけれども、例えばイタイイタイ病であったりとか、水俣病であったりとか、そういったものがやっぱりこのころ出てきます。経済優先でやっていく中で、さっきのまちづくりの話をしましたけれども、自分たちのまちは自分たちでつくるというのをやっぱり経済的に活性化していこうというふうな勢いの中では声がだんだん小さくなるんですね、どうしてもやっぱり流されてしまうというか。

そういう中で、地域というものもそういう大切なものをどんどん潰していくというんですかね、これは戦後のやっぱり復興期の考え方というんですかね、これまでの歴史・文化、伝統的なもの、日本的なもの、それを一旦全部否定するというような、そういう風潮が非常に出てきたという、そういうことも歴史的にあるようです。歴史・文化というもの、伝統的な暮らしというものは非常に封建的であるから、新しい日本をつくっていくときには非常に邪魔になるものだというふうな物の見方をする、そういうやっぱり風潮みたいなものもありました。これ、いい悪いじゃなくて、その時代の空気として受け取ってください、いい悪いではないです、空気として受け取ってください。

ですから、やっぱり後ろ振り返る、歴史・文化を考えるとということは後ろを振り返るというふうな、そういうニュアンスを持たれていたということなんですよ。それよりは前を見ていくというふうな中で走ってきたわけですが、そういう公害問題が出てくる。

それから実際にやはりコミュニティーが全部分断されて立ち消えていくわけですから、なかなか人の暮らしというものが殺伐としてくるわけです。今、きずな、きずなと言われてますけれども、その当時もやはりコミュニティーが、共同体というものが崩壊していくという中で、いろんな社会の病理的なものが出てくるわけです。みんな都会に行こうとして、全員がその何ていうんですかね、ふるさとを後にして都会へ便利なほうへ行こうというふうに移動しますので、だんだん過疎的な地域もふえてきたというような、すごい格差をなくすため

に全国均一の整備をしてるはずなんですけれども、人の動きというのは逆で、やっぱり都会のほうに流れてしまう。今とそう余り変わらないようなことがやっぱり当時もあったのだと思います。

そういう中で、やはりもう一度、自分たちの住んでいる場所の自然ですとか、それから生活環境ですね、歴史や文化も含めた生活環境というものを何とかしていかなければならないのではないかという考え方がちょうど1970年代後半に出てきます。聞き覚えのある方も多いと思いますけれども、地方の時代、地域主義という言葉がここに出てきます。これは神奈川県長洲知事さんがおっしゃった言葉でもあるんですけども、ここで効率化的な、もう何ていうんですかね、経済優先の効率的な、そういうやり方だけじゃない、自分たちなりの方法を編み出していこうというような動きが出てきます。ちょうどこれが内発的発展というふうに当時は言われていました。もう亡くなられてちょうど10年になるんですけども、鶴見和子さんという方が内発的発展論というふうな社会変動論というのを提唱されてまして、そういうふうな考え方にやっぱり地方の時代、地域主義というふうな考え方もかなり影響されたのではないかなと思います。

これはどういうことかという、その外発的というのは今のように企業を呼び込んでくる、大工場を呼び込んできて、それによって地域を活性化させていくとか、それから大きい道路をつくって都市部とのパイプをつくっていくとか、何かよその力、外の力を活用してやっていくという方法が外発的な方法というんですけども、それに対して内発的というのは地域が持っているもの、それを生かして活性化させていこう、これは今となっては基本になってますけれども、当時は基本ではありませんでした。はあ、そんなことできるの、うちには何もないというのが普通でした。そういう時代に内発的発展論の考え方も踏まえて、地域固有の価値を自分たちで見つけ出していこうという動きが出てきます。それが歴史・文化を生かしたまちづくりの始まりです。それまでは確かに歴史・文化、そんな何ていうんですかね、経済的な効率化優先とはいえ、やっぱり文化・歴史というもの、大切にしようという動きはありました。それが町並み保全運動とかにつながってますし、実は文化財保護法というのがあるんですけども、これが何と1950年、終戦間もなくもうでき上がってたというから、決して日本人が歴史や文化をすごく低く見ていたということではないんです。全然低くは見えてないんだけど、それと生きていくという社会をつくっていくということがどうもまだかみ合ってなかったという、そういう時代であったんだというふうに私は理解しております。それが、いやいやいや、自分たちの生きるという土台をつくっていくものの1つなんだというのを意識し始めたのがこの1970年代後半、歴史・文化を生かしたまちづくりというのが始まったというところとリンクしてきます。

ちょうどこのころ、日本の私たちの感覚も変わってきてるんです。例えばJRさん、そのころは国鉄ですけども、ディスカバー・ジャパンキャンペーンというの、皆さん、覚えて

らっしゃいますかね、いい日旅立ちが流れて日本の知らないまちに行こうということで、例えば金沢とか萩とか津和野なんかが有名になりました。アンノン族とか聞かれた方、いらっしゃいますかね、それは大体私ぐらいの年齢の方だと思いますけれども、そういうふうなものが出たりなんかして、これも今は当たり前ですよ、小グループで小さなすてきなまちに行って、おいしいものを食べて、すてきなこの町並みを見てというのはもう普通になってますけど、当時はこれはすごく先進的なことでした。

例えば皆さん、まち歩くときにイラストマップなんてありますよね、かわいらしいイラストの入った、おいしいところのお店はここみたいな、もう今はスマホで見えるようにもなってますけれども、そういうイラストの入った地図すらこの時代はなかったんです。アンノン族が出るようになって、ようやくそういったものも整備されていくようになりました。直接のやっぱりそれを牽引したというのは $a n \cdot a n$ です。 $a n \cdot a n$ が、これはパリの E L L E という雑誌を引き継いで $a n \cdot a n$ になったんですけれども、そのパリで紹介されてるイラストマップみたいなものをうまくまねて、自分たちでもそのような案内の仕方を開発していったんです。それが今、進化してスマホで見るといようなことにもなってるんですけれども、本当にそういう時代だったんです。

このころに、さっき 1950 年に文化財保護法と言いましたけど、これはまだまだ記念、何ていうんですかね、もっと何か仏像であるとか、そういういかにも大切なものだったんですけれども、そこに伝統的建造物群保存地区制度、伝建地区と言われるものです、いわゆる建物、そういったものにも光を当てましょうというのがこの時代になっています。

それからとても有名なものです、1980年、一村一品運動というのが出ました。今、自分ところの伝統野菜とか、それからそういった産品、伝統のそういう何か例えばワインとかいうものを売りにしようというふうなことで盛んにやっておられますけれども、やっぱりこの当時はまだそんな発想すらなかったんです。でも、自分たちのところにはこんないいものがある。それを世の中にちゃんと伝えていって、それで活性化しようという、そういう発想がここに初めて生まれたということで、今当たり前のように思ってることが、実はこの時代、今から去ること30年ぐらい前にばつと湧き出たということになるんです。それが歴史・文化を生かしたまちづくりの始まりで、歴史・文化というものが、それまでは私たちの精神的なものを支えたりするという役割が大きかったんですけれども、この時代から具体的に資源、地域資源という言葉が使われるようになりました。資源をどう活用していくかという発想がここに生まれていったんです。そこで出てきたのが保存と活用という言葉のせめぎ合いです。それをどういうふうに生かしていくか、自分たちの都合のいいように活用していただくで本当にいいのかという議論も実は出てきたのがこの時代だったんです。

大きな時代の流れの中でいきますと、やっぱり高度成長期の陰は出てきてはいたんですけれども、ただ、本当に日本は敗戦から高度成長期行って、随分と豊かになってきました。ち

よほどのまちづくりの黎明期ですよ、70年代後半から80年という成熟期に当たりますので、どちらかというとなかなか消費社会に移行していったという、そういう時代です。ですから、初めは自分たちのやっぱりコミュニティーをやっぱり再生したい、共同体、もう一回、ちゃんとしたい。それには自分たちの土地にあるものを自分たちが知って、それを生かしていきたいという、そこからスタートしたんですが、それが消費社会と結びつきますと、今度はまた経済のほうにぐっと入っていくわけです。それをどう売っていくかというような発想になります。

ですから、それがさっき申し上げたような保存と活用の中の大きな揺れを引き起こすということになるんですが、時代はバブル期に突入します。そうすると、こっちの消費社会のほうはかなり肥大してきますので、歴史や文化も地域資源でしたね、この資源が商品を生む資源に変わっていったのも特徴的なことなんです。

ちょうど竹下さんのふるさと創生事業なんていうのもこの時代に出てきてます、1億円をね。これは本当に各地域が一体何を考えてるのかと、今思えばです、いろいろ、いろいろやってんなというのがあります。本当に地道なものに使われたところもあれば、もう本当にどでかい、何か多目的ホールみたいな、どかんとつくってしまう、ハードのほうにばかんと行かした人もあるし、あるところでは、もうこれは言わんといてくれと言われてるんですけども、あるところでは金の延べ棒みたいなものでさわるみたいな、何かそういうふうなところに行かれた方もあるという、それぐらいに何かすごく成熟期であるがゆえに、何か感覚がおかしくなってきたのかなというのがあります。

1987年、リゾート法ができますけれども、これでいろんなところが東京からの資本が入ってきまして、リゾートホテルをつくるためにすごくきれいな景観のところを潰してリゾートホテルをつくるか、それから今まで地道にまちづくりを積み重ねてきたところでも、そういうお金の威力に自分とこの田んぼをばんと売ってしまって、何かの施設がばんと、わけのわからない施設がどんと建つというようなことになって、せっかくコミュニティーをもう一度作り直そうと思って始めていたはずなんだけど、それが逆にお金ということが入ってくることによって分断されていくみたいな、そういうことが起こったりというような、本当にややこしい時代がこの80年代に入ります。

文化のほうもどっちかというとなかなか華やかになっていきます。文化行政とか、企業のメセナ活動とか、そういうものが出てきたのもこの時代なんですけれども、やっぱり文化というものを地域づくりのかなめにしよう、これは純粋にそう思ってたんですけど、やっぱりこの活用の仕方ですよ、このときにテーマパークとか、多目的ホールとか、コンサートホールとか、美術館、博物館というのが地方にいっぱい出てきます。それはやっぱりそうやってハードを整備することが文化にやっぱり何ていうんですかね、かかわることなんだと、そういうことが文化を大切にしていける事業の1つでもあるというふうなどうも発想になっていく

ということなんですね。

ということは、今から思えばですよ、何とそんなお金使って、そんなことが文化を育てることにつながるかと、きっと皆さん、おっしゃると思うんです。でも、それは時代を経ているんなことを経験して、いろんな方法を見てきたから言えるのであって、そういうのがない時代ですよ、そういうのがない。しかも消費社会に突入している、それから経済的にもとても豊かになってきている当時の日本では、やっぱり美術館や博物館をつくる、コンサートホールをつくるというそういうハード整備をしていくということのほうが大切。そっちのほうに意識が行っていたということになると思うんです。

だけれども、そういう時代はそう長くはやはり続かずに、91年にバブルが崩壊する。それから失われた10年、20年というふうな時代になってきますよね。だから、ちょうど私はさっき御紹介いただきましたけど、奈良まちでまちづくりを始めたころというのは90年代に入ってからです。ちょうどバブルみたいなことも気になり始めて、いろいろと計画立てられてたのが、やっぱりお金がなくなってきたから頓挫していくということもちらほらと聞く、そういうふうな時代でもありました。ただ、やっぱりそういう中でも、例えばアサヒビールさんなんていうのはメセナ活動をすごく早い時期からやってらっしゃいました。サントリーさんもそうですけれども、やっぱり息の長い活動をしようというところ、そういう企業もやはりありました。だから何となく流行でやってるところと、心底思っただろうという、やってきたところという、その差みたいなものが実はこのバブル崩壊時に見えてきたということがあります。

私たち自身もまちづくりにかかわってた人間たちも、もう一度、今まで華やかにイベント、イベントみたいなことやった、確かにやってたかもしれないけど、少し足元見ましようというような動きがやはりこの時代に起こってきます。そういうふうな流れになったときに起こったのが阪神・淡路大震災です、1995年。これで、これボランティア元年と言われるように、今までどちらかという歴史・文化、それから草の根の活動なんていうのもあったんですけども、どっちかという大企業さんとか、お金のあるところが結構引っ張っていくというような動きが目立ってたんです。それがバブル崩壊ということになったときに、今まで地道に活動していた草の根的な動きというのが活発になってきました。自分たちのできることは自分たちでやろうというような動きがやっぱり出てきたわけです。これはある意味、効率一辺倒の暮らしのあり方というのを、もう一度、身の丈に合った生き方、暮らし方というものを考えるきっかけにしたいというような動きとも重ね合わせまして、いろんな取り組みが出てきました。市民と行政との協働という言葉もこのころ生まれています。

そういう中で98年にNPO法というものができ上がって草の根での活動。今まで私たちも奈良まちづくりセンターというところにいたんですけども、90年入ってすぐのまちづくり。社団法人をとってはったんですけども、それでも、やっぱりどこの何や、わけわか

らん人たちが勝手に活動している人、団体というふうに見られてました。今、NPOとかNGOと言うと、ああ、そうかというふうに納得されると思うんですけど、その当時はわけのわからない人たちというふうに言われていました、そういう時代でした。

それを経て、この95年の阪神・淡路でボランティアとか草の根のすごい活動が評価されるようになって、世の中の的にもそういう個で動く、草の根的なそういう既存の企業とか行政とかという組織にかかわらず、自分たちの思いでもって動いていくということにやっぱり社会的な認知がされるようになってきたということなんですよ。それを後押しするように法律的にも整備されたということで、一挙にそういう動きがはね上がっていきます。

そういう中で、この当時の歴史・文化ってどうなってたかという、やはりこれからの暮らし方、生き方というものをもう一度、考えていくときの何かきっかけにしたいというふうな、そういう動きが変わっていきます。ですから、今までの流れでいきますと、戦後復興期はまだ何かそういうものはどうでもええわって、そんなん後回しや、どうでもええわじゃないですけども、ちょっと後回しみたいなの、経済先やからというところから、余りにも経済が進み過ぎる中で、何となくこのままで走っていいんやろうか、ふと立ちどまるというときに、地域の歴史・文化、ちょっと見てみよう。もう一度、自分たちの足元を見て、自分たちの身の丈に合った暮らし方って何か考えようということが出てきた、これが歴史・文化を生かしたまちづくりの黎明期と言いましたよね、そうだったと。

ただ、その中でまた経済的な活動と結びついて、消費社会という大きなうねりの中で翻弄されて、どっちかという経済的なことにがっとう傾いた。その経済優先であったのが、バブル崩壊でぼんと断ち切られた。さて、どうするかというときに、また歴史・文化というものがもう一度、足元を見直しましょうということが出てきたと、そういう役割を担ってたんですね。

このときの歴史・文化は何と結びついたかというアートと結びつきました。それは、やっぱりバブル期は何でみんながおかしくなってたかという、日常的なことに飽きて非日常の世界に行きたいという、テーマパークとかができたというのもそれですよ、非日常の世界を味わいたい、そういうことが非常に個性を発揮するものだ、個性の時代、個性の時代というふうに言われてたと思うんですけども、バブル期前というのは。そういう何か日常と離れたところで何かぱっと華やかにするということを個性的というふうに言われてた時代だったんですけども、それが壊れてしまったとき、もう一度、日常ありふれたものの中にある魅力を、宝物、これを見出していきましょうという動きが変わったときに、アートの視点を入れてみる。ですから、今、アート・トリエンナーレとか、ビエンナーレとか、すごくもう各地でやってますけれども、このころ、一番有名なのは大地の芸術祭って北川フラムさんがやってはるものなんですけれども、あれは有名ですし、それから瀬戸内アートですね、直島とか、ああいうふうなところの現代アートを入れていくとか。そういうふうにして当たり

前の空間の中にアートの作品を置くことで当たり前が当たり前に見えなくなってくる。そういうふうなことを通じて何か魅力みたいなものを探っていこうというような動きが出てきます。

そういうふうにして、もう一度、私たちの手に歴史・文化を取り戻しましょうというような動きが実はバブル崩壊、失われた10年、20年というふうな間にひたひたひたと水面下では進んでるという。だからNPO、NGO業界、私の所属してるようなところでは、その失われてないと、つくっていく時代やったという認識を持ってる人たちがほとんどなんです、実は。だからそんな失われたなんて悲しい言葉使わんとこうなみたいなことを言ってるのは事実なんです。それだけ自分がどこに立っているかによって全然感じ方が違うねんなということのはしみじみと思うんですけれども。

そういうふうな中で、歴史・文化というものを見直すおもしろい法律がどんどんできています、2004年に景観法というのが出てきました。それまではさっきの伝建地区にもありました町並みとか、そういう部分的なものだったんですけれども、もっと広く景観、私たちが暮らしている空間そのもの、広い空間そのものをやっぱり大切にしていきたいと思いますという考え方が出てきました。まずこれは国交省さんから出てくるんですけれども。それを受けまして翌年2005年には文化庁さんのほうも重要文化的景観という、そういう法律をつくれます。

それから2008年、これがもう本当にまちづくり業界の人たちはみんな喜んだんですが、歴史まちづくり法というのができます。これは何だかんだ言っても省庁で別々にやってたんです、国交省系は国交省系でやるし、文化庁系は文化庁系でやるし、それから農林系はやるというふうに別々にやってたのを一緒に考えていきましょう。つまり、ハードとソフトをあわせてまちづくりの方法をやっていきたいと思います。これも今じゃ当たり前になっていますけれども、やっぱり当たり前ではありませんでした。別々に皆さん、それぞれの省でやってらっしゃる、それなりのやり方だというのがあったんですけれども、それを包括的にやっていきたいと思いますというのがようやく2000年に入ってから出てくるようになって、結局、点じゃなくて面として捉えてやっていきたいと思いますというふうになってきました。

ですから、皆さんが取り組んでらっしゃいます世界遺産、これも古墳だけではないはずで、全体的な景観ということも考える。だからバッファゾーンをどういうふうに置いていくかという議論になってきてると思うんです。これは何を意味してるかという、今までの歴史・文化というのは、例えばもう物産にしる何にしる、物、点、本当に点ですよ、その物、対象というのがはっきりとしてたんですけれども、今は私たちの生き方そのもの、どういう生活の仕方をしてるか、景観ってそうですよね、景観というのはその中に私たちが暮らしますから、景観を守るということは、必然的に私たちの暮らし方をどうするかということが、周りへの配慮みたいなこともかかわってくるわけですから、すごく生活そのものとかかわっ

てくるものになるんです。だから他人事とは言えなくなってくる、そういう状況に今なってきたということになるんですけども。

そういう流れの中で、また大きな転換、きょうも東北で地震がありましたけれども、すごく考えるきっかけになったのが3・11ですよ。あれでやっぱりもう失われたなんて本当に言ってられないと、大転換点で本当にこれからの生き方をどうすればいいんだということを真剣に考えなあかんなどというところに来たよということをやっぱり突きつけられて、日々、皆さんも議員活動の中でそれを思っただらっしゃると思います。

そういう中でも、いろんなグローバル化、観光立国ということも言っただらして、ふるさと創生なんていう懐かしい言葉も、80年代で言っただ言葉をもた言っただたりとか、成長戦略みたいなことも安倍さん言っただはります。その成長戦略は高度成長期の成長戦略とまたニュアンスの違ふものかもしれないですけど、言葉だけ聞いたらえつというふうな感じになりますよ。その辺をやっぱりしっかり押さえないきゃいけないなど。低成長だということもわかってるし、格差が出てきてるということもわかってるし、何ぼグローバルと言っただってテロは起こってるし、移民の問題だつて人ごととは言えないだろうし、そういう中で私たちはどういふこれから暮らし方をするのかな、そこと歴史・文化をどう保存・活用していくのかなと、このあたりをやっぱり離さないで、きちつと結び合せて考えていくということが大切じゃないかなというふうにするわけなんですけれども。

ざざざざざざつと申し上げましたけれども、例えば皆さん、きょうお集まりの方々も年齢がいろいろだと思ふんです。例えばもう1960年代、70年代いうたら働いてたかもという方、いらつしやいますか。やっぱり。

80年代、働いてたかもという。やっぱりそうですね。

90年代、働いてたかも。なるほど。

2000年代という、そうでございますか、やっぱり。

戦後71年、いろいろありましたが言っただも、このたつた何年間の間、今、お話ししましたよ、まちづくりの三十数年ぐらゐの間ですけど、ごろごろごろごろつて変わりましたよ。だからやっぱり一人一人で考えていかないと、同じこと言っただも、多分ニュアンスが違ふと思ふんです。バブルを経験した人と経験してない人では全然ニュアンスも変わってくるだろうし、本当に失われた、よく学生たちに怒られるんですけど、失われた時代とか言わないでほしいと思ふます、そんな時代に私たちは生まれて生きてるんじやありませんとつて、ぶつとつて膨れて言うんですけども、それは結果として言っただだけで、その時代からスタートしてるとつたら、それは失われても何でもないんです、そういうもんだからスタートしてるとつことなんです。だから、やっぱり自分がどういふ時代をどういふふうにするてきたのかなということ、やっぱりちつと足をとめて振り返つてみるということ、さつき歴史・文化でどんなイメージを持たれますかということ、を深めていく上

ではすごく大切なことなんじゃないのかなというふうに思うんです。

ここで問いかけの2、行きます。今いろいろと、べらべらべらと時代を追って話しましたが、さて、皆さんにとって歴史・文化ってどんな存在ですか。簡単な言葉で書いてみてください、どんな存在ですか。言ったらどういうふうにつき合ってきたかということですかね。余りまちづくりとか何とかと結びつけてというの、なかなか普通にはしないかもしれないんですけど、ただ、でもやっぱりそういう時代を生きてくる中で、いろんな局面を見る中で、歴史・文化って自分にとってどんな存在なんでしょうね。

どうですかね。

○清久功藤井寺市議会議員 と言われましてもね、何か思いのままに生きてきた人間なんで、ほいで先ほどお話がございました、ちょっと話変わりますけども、私も近くに応神御陵の横に住んでますもんで、その関係できょうも先生のお話聞かせていただきまして、今おっしゃったことについては、本当に自分の思いのままに生きてきただけの男なんで、ひとつまたよろしくをお願いします。

○足立講師 思いのままにですね。でも、そう言いながらも、この体の中にはいろんな歴史・文化が詰まってるんでしょうね。やっぱり言葉に出してみるって意外に大切なことなんですよ。

どうですか。

○麻野真吾藤井寺市議会議員 私は自分の成長です。

○足立講師 なるほど、すてきな言葉ですよ、成長。成長を一言で言うとどんな感じがございましたか。ここにあらわれているという感じですかね、なるほど、成長、すてきですね、それもね。

どうですか。

○花川雅昭羽曳野市議会議員 そうですね、日本としての誇り。

○足立講師 どういうところが誇られるんですか。

○花川雅昭羽曳野市議会議員 やはり日本人の持ってる心とか、そういうものが、海外と、そういうところですよ。

○足立講師 具体的に言うと。

○花川雅昭羽曳野市議会議員 具体的に。

○足立講師 どういうところが。

○花川雅昭羽曳野市議会議員 例えば礼節とかね、そういう面とかね。思いやりの気持ちとか。

○足立講師 お父さん、お母さんからいろいろ強く言われましたか、ちゃんとしなさいとか。

○花川雅昭羽曳野市議会議員 いえいえ、そうでもない。

○足立講師 そうじゃなく、ああ、そうですか。

この辺のこうやって聞いてはる、あなたはどうか。

○小堀清次堺市議会議員 地元ですかね。

○足立講師 地元。

○小堀清次堺市議会議員 はい。

○足立講師 その中で一番。

○小堀清次堺市議会議員 僕の地元に1400年ぐらい続いているお寺がありまして、高倉寺というんですけど、まさに今もあるし、いろんな人來てるし、今に通じる歴史・文化かなと。

○足立講師 自分が生まれるよりも前に、ずっと前にあって、さらにあって、そういうのって自分と比べてみると、ほうみたいに思ったりすることもありますよね。

どうですか。

○森頼信堺市議会議員 当時の方々の知恵に学ばされますね。

○足立講師 歴史・文化、知恵、知恵袋ということですね、なるほど。

意外に歴史・文化、歴史・文化と言いながら、自分でどんな存在かなと思ったときって、ちょっと、うんっと思っちゃうんですね。だけど、さっきおっしゃったみたいに成長というふうに思われる方とかというのは、何か寄り添いながらみたいなものがあつたんでしょし、今こういう私が問いかけることによって、自分の身近にあるものを、そういや1400年続くお寺があつたなとしみじみ思ったり、目の前にあつたぞというの、向き合い方がまた変わったりとか、そういうことって意外にあるのかなというふうには思うんですけども。

何か当たり前のことかもしれないんですけども、時々、自分に問いかけてみるって、やっぱり大切なんじゃないのかなと思いますし、何でそう思うのかなということを自問自答してみるとということもやっぱり意味があるんじゃないのかなという気がするんですね。それは自分がそうであるように、人もそれぞれに存在があるわけですから、どういう存在かということがあるわけですから、自分が豊かな言葉を持っていれば、相手に尋ねたときにも、その豊かな言葉を聞き取ることができるようになるんじゃないのかなというふうに思うんですね。だから、より具体的な言葉で考えてみる、表現してみるというのも時々やってみると、お酒でも飲みながらやってみるといいのかなというような気がいたします。

さて、ここでちょっと世界遺産についての話に移りたいと思うんですけども、世界遺産の考え方なんですが、ちょっとさっきの歴史の話に戻りますけど、まちづくりからの変遷から見てきた、1972年、ちょうど田中角栄さんが日本列島改造論を出さはつたと、日本は高度成長期でぐんぐんやっていると。ちょうどこの1972年に世界遺産条約というのが締結されたんです。

これは何で締結されたかといいますと、背景には、ちょうど1960年代にさらにさかのぼるんですけども、エジプトのアスワン・ハイ・ダムって聞かれたことあると思うんですが、そこでダム建設をするということになりまして、スフィンクスの像があるじゃないですか、アブ・シンベル神殿というんですけども、あれを含むヌビア遺跡と言われる、それが

水没するということになったんですよ。びっくりしますよね、そんなすばらしい、スフィンクスとかピラミッドが、えっ、ダム建設のために水没すんのかということではびっくりするんですが、当時は東西冷戦の時代です、アメリカとソビエトが覇権争いをしてますよね。ちょうどこの土地というのは両方ともがかかわってまして、なかなかこの世界的にどういうふうに動いたらいいねんって、みんな牽制するので、うまく働きかけないんですよ、アメリカとソビエトの顔色うかがって。

そういうところで、うわっ、水没してしまうということになったときに、ユネスコが、これはエジプト一国の宝物ではございません、人類共有の宝物じゃないですか、何とかしなきゃいけませんよねということで、ユネスコにかかわる若手研究者の方々が中心になって大世界的なキャンペーンを張らします。でもって、募金活動しはります。それで何とか残ったんです。これは私も初めて映像見たときびっくりしたんですけど、60メートルぐらい、スフィンクスを引き上げるんです、がががががががと、で、今あるところに置くという、そういう大作業をキャンペーンで募金活動して何とかしようということでやった。どっかで聞いた感じですね、まちづくりの言葉が生まれたというのと一緒に、自分たちの宝なんだから守らないかんとということで動いたという。いわばユネスコが呼びかけたとは言ってますけれども、その実際に動いてた人たちは一研究者の方々ですので、非常に草の根的な動きの中でやっていかれたということになるんです。これが契機になって、1972年に世界遺産条約が締結されました。

日本はこのとき入ってないんです、日本が入ったのは1992年です。何で入らへんかったかという、やはり世界的に経済優先になってますので、そんな文化財を守るということで協力と言われましてもというふうになったという部分もあるんですけども、日本の場合は、さっき言いましたように1950年に文化財保護法というのができます。これはすごくすばらしい法律なんです。世界的にもよくここまできめ細やかに保存ということを考えてるなど評価されている法律なんです。これは日本は誇れる法律なんです。こういうのがあるので、自国でとにかく文化財守れますのでというようなことがあって、この72年の段階では見送られたというふうに言われています。

そういう中で、日本は92年に125番目という中で入るわけなんですけれども、世界遺産が今、ともすると言われますと、やはり観光的な視点ですよ、まあ言ったら経済的な部分で世界遺産に入ったら観光客も来て潤うぞという、そういう発想というのがやっぱり出てきてまして、だから経済は悪いとは思いません、必要だと思うんですけども、でも、やっぱりそれをどういうふうに折り合いをつけていくか、何のためにこれを守るのかとか、何のために保存活用するのかって、これは本当に考えないとあかんねんというふうに思うんですけども、余計に今ちょっと気になる場所なんですよ。

そういう中で、ちょっときょう皆さんに歴史・文化遺産の継承のあり方というのを考えて

いく上で、キーワードとして大切に考えたいなと思ってるのが、持続可能な、よく聞かれますよね、持続可能性、サステナビリティですね。これなんですけれども、実は今、世界遺産もこの持続可能性ということを非常に考えるようになっていきます。この言葉自体は文化財じゃなくて、自然環境というところからスタートして、実はこれもちよっと背景を言いますと、この1972年というのはすごいいろいろいんですよ、成長の限界という本が出てるんです、聞かれたことありますか、成長の限界という。これはスイスにあるシンクタンクのローマクラブというところが出版した本なんですけれども、そこで言われてたのが、70年代ですから世界的にも、もう経済、経済、経済、経済と言ってる時代です。そのときに、このまま経済成長路線を続けたら、今後100年以内に地球は制御不能な危機に陥るぞということを警鐘した本なんです。これはすごくセンセーショナルだったんですけれども、でもやっぱり世界的に見ても経済のほうに優先されてますので、とても冷ややかに軽視されてましたし、日本政府もやっぱりそうだった、政府だけじゃなくて日本社会もそうだったようです。なので、だから何とかしようという動きにはやはり当時はなかった。

ただ、そこで芽生えた次世代に負荷をかけずに残していく、送っていくという発想、今までは自分たちの未来のためにやっていく、今を頑張るといって、そういう発想で来たのが、次世代という、まだ顔の見えぬ人たちへの思いというもの、そういう存在を意識するというのが実はこの時代から、70年代から世界で少しずつ出てきていたんです。それが水面下ですとひたひた、ひたひた、ひたひた、ひたひたと動く中で、1980年に初めてこの持続可能な開発という言葉が出ます。これは国際自然保護連合と国連環境計画がまとめた世界保全戦略、自然環境も含めたものなんですけど、地球環境をどう考えるかということです。ここで初めて出されたんです。それが出されて、やはり皆さんがいろんなことを考え始めて、これはもう御存じだと思いますけれども、1992年、日本が世界遺産に加盟したこの時代ですよね、このときにちょうどブラジルでは国連地球サミットが開かれてまして、環境と開発に関するリオ宣言、アジェンダ21というものが出されましたが、ここではっきりと持続可能な開発ということが考え方としてこういう考え方をしていこうということが出されたんです。

それを受けてユネスコです。ユネスコは世界遺産の条約の条文の中にはこの持続可能な発展というものは書いてないんですけれども、書いてないんですけども、遺産の保護と継承という理念と結びつけて、この持続可能性というものをいれていこうというふうな動きになってます。それが具体的な形としてあらわれたのが1994年、文化的景観という概念が出されます。それはさっき言いましたよね、日本でも何年でしたかね、法律ができましたよ、2004年に景観法、2005年に重要文化的景観というのができましたよというふうに言いましたけれども、これができる背景は、こうした世界の動きがあったということですね。ここで景観というものを人間と自然が共同作業してきた、人間と自然の共同作業をキー

ワードに自然の恵みを享受し、人間の営みを継続してきた持続可能な活用の具体例としてこの文化的景観というものを出していったということになります。

そして、こういう考え方は世界遺産の中でも非常に浸透していった、そこで保存計画、管理計画というものをきちっとしましょうというふうなことが強く言われるようになって、2012年、世界遺産条約採択40周年記念最終会合が京都市で開かれたんですけども、その中で地域社会などのコミュニティーが参加する開発計画、管理計画の重要性というものが示されて、持続可能な開発の担い手としてコミュニティーの役割、これが非常に大切ですよということがしっかりと提示されたということで、今コミュニティーを何とか盛り上げていこうというような動きになってきてるんです。

だけれども、ここで皆さんに考えていただきたいのは、じゃあコミュニティーって何と言うときに、実態のないものがそこにあるんじゃないで、そのコミュニティーをつくってるのは誰かというところなんですね。さっきから私たち一人一人を考えましょうねと言ってるのは、私たち一人一人が集まってのコミュニティーなので、コミュニティーに役割を託すということは、一人一人が託されてるという、この意識を持たない限りはあかんというところなんです。ここのところが意外に弱いので、自分自身で考えていくということから始めたほうがいいなというのをすごく私自身は感じるようになったわけです。自分が何をどう伝えていきたいと思っているのか。

問いかけの3です。皆さんは歴史・文化を通じて何を伝えたいと思っておられますか。イメージがあり、存在としての歴史・文化を考え、そして今はそういうものを次世代に伝えていく、誇りとして伝えていきたいと思いますとか、継承していかないとはいけませんねと言います。でも、具体的に皆さんお一人お一人は何を伝えたいと思っておられるのでしょうか。そんな大層な言葉ではなく、本当にこの暮らしの現場で生きている一人一人として、これを伝えたいな、これは残しときたいなというものです。

○松村尚子羽曳野市議会議員 これを伝えたいとか、これを残していきたいという具体的なものはないんですけども、やはりこの羽曳野、藤井寺、堺の中で伝統的なもの、千利休が愛したお茶であったり、与謝野晶子さんであったり、また羽曳野であれば応神天皇陵含めてさまざまな古墳があります。そういった先人たちが築いてきたものをいかに守りつつ、残していくかというのが私たちに課せられた課題なのかなというふうに思っています。

○足立講師 すごく議員さんのお答えだったんですけど。例えば身近な人に、私はこれが好きやから、これ伝えたいわというそういうレベルでいくと、今の先人たちの中にあるものの何なんだろう、何なんだろう。堺市の市長さんは心意気やというふうにおっしゃってましたけど、何かそういうのを伝えたいとかいう言葉で、心意気、いい言葉やとか思ったんです。そういう感じの言葉で言うとどんな言葉でしょうか。

○松村尚子羽曳野市議会議員 先ほど議員さんがおっしゃったように、日本の心というか、相

手の気持ちを思いやる心であったりだとか、優しさであったりだとか、そういったことはやはり守っていききたいし、伝えていきたいなというふうに思います。

○足立講師 何かそういうのってありますよね。

ちょっと女性の方中心に聞いてみましょうかね、どうですか。

○田代優子堺市議会議員 私たち、今の私たちがつくり出せないものなので、大事に大事に伝えていかないといけない、何か責任はすごく感じます。

○足立講師 具体的にそういう何かありますか。難しいですか、ちょっと考えときましようね。意外にそれを言葉にするって難しいでしょう。でも、一番伝えたいもの、自分の言葉でやっぱり言ってみませんか。

○木下誇藤井寺市議会議員 伝えたいもの、そうですね、そのときそのときにかかわった人たちの思いとかというのをやはり残していきたいなとは思っています。

○足立講師 そうですね、どういう思いで古墳なり、ですから、いろんな技術も開発されますけど、古墳つくるには、その道具をつくるというのがありますけど、あれ、職人わざですよ、どんな感じでそれをつくっていかれたのかなんていうのを考えてもそうですし。どうですか。

○広瀬公代羽曳野市議会議員 長い歴史の中で、すごいいろんな失敗もあったと思うんです。それを今後にどのように生かしていけるのかというようなのをやっぱり伝えていきたいと思えます。

○足立講師 そうですね、何か結構皆さん、かたくなられたりとか、いろいろあるかもしれないんですけど、でも、さっき人が生きてきた足跡というふうに思われたとしたら、一体私たちはどんなふうに生きてきたのかなということを感じ取って、失敗もしただろうし、うれしいということもあったかもしれないし、でも、そうやってこうやって頑張ってきたもんねとか、こういうことをやってきたねという、何かそういうものを、それこそ本当に思いとか心ですね、そういうものを伝えたいなというふうに思うということもあるかなという感じはするんですけども。

きょう幾つかいろんな話をさせていただいたんですけども、多分、皆さん、議員さんだから、すごくまとまっているいろんなことを話すということはよくされてると思うんです、吟味して、吟味して、言葉を選んでまとめて話すということはよくされてると思います。けれども、そういう言葉に集約していく前に、自分が何となく感じてるんだよね、こういうことを大切にしたいんだよねという、そういう日常的な感覚の中で湧き出てくるものというのは、実は自分の本当に伝えたい本質的な部分とかかかわってる、深く交わってるという場合は多いんじゃないかなということがああるんです。

ただ、どうしてもそういうものと、自分でそのことをやっぱり自問自答しながら、自分に問いかけながら、そういう言葉を深めていく、味わっていく、考えを深めていく、味わって

いくというのが実はとても忙しい中ではできにくいことなんです。でも、今やっぱりそれをやらないといけないんじゃないかなと思うのは、例えばまちづくりにしても、世界遺産のためにこれから何をどうしたらいいんですかということにしても、いろんな事例が私たちの目の前にはあります。だから、いろんなことを、これをやってみよう、あれをやってみようということを試すには、本当にいろんな方法も、制度もあるわけなんですよね。だけど、そういうもの、乗っかってやっていったら、それはいつまでたっても借り物にならへんかなという気はしないでもありません。それはさっきから言いましたように、まちづくりでも何も、もうすぐ周りからも余り評価されていない中で、いろいろと試行錯誤しながらやってきた私たちの先輩たちというのは、それこそ失敗の連続だったかもしれません。だけれども、何が支えてたかということ、一人一人の思いなんですよね。それを具体的に伝えるためにどうしたらいいのかということで、あの手この手でいろんな方法を実験していった。それは80年代すごく、70年代から80年代、いろんなことをされていました。それは本当にどうということだなと思うんです。

時々、私、若い子たち、学生たちと話してて、すごくさとり世代とか言われる人たちと話してて、何となく熱いもん、感じられへんかなと思うときがあります。それは何でやろうと思うと、周りにもう既にいろんなメニューが用意されていて、自分はそのメニューにのっつてやったらいいということになるから、七転八倒して、ああでもない、こうでもないということをしなくて、ずっとそこに行けるんです。だから何となく熱が感じられないと思うだけで、本当は一生懸命なんです。でも、私たちの時代、それから、その前の世代というのは何もなかったですから、とにかくやるしかなかった。そういう中では、もう一生懸命、話してやっていくしかなかったということなんです。

ここで最後に1つ、発展・継承のあり方として、私はこれは本当に参考になると思うのは湯布院のまちづくりです。湯布院、今、熊本の地震があっってお客さんの足が遠のいたりかしています。だけど、今、あそこ若手の旅館の旦那さんやらが一生懸命頑張っって、何か自主上映会とかやって盛り上げようかというようなことをやってはるそうなんです。それはあるテレビを見て確信したんですけど、その若旦那、本当若いんですよね、30代かな、あの人が言っていたのは、やっぱり自分のところの旅館もえらいことになってるし、お客さんもなかなか呼べないかもしれない。だけど、何とか地域、コミュニティー、頑張っっていくかなというときに、彼らが今やっていこうとしていることは何かということ、やっぱりお客さん来るために何かホームページとか使ってPRとかするのかなとかって思うじゃないですか。じゃないんですよ、彼らがやるのは、コミュニティーの人たちがめげないように、もっと、ああ、湯布院で頑張っっていく、湯布院、よかったなと思えるような、コミュニティーの人たちがまず喜んでくれはる自主上映会を連続してやろうということを考えてはるんです。はあっと思いましたけど、でも、それは彼らが急にそう思ったんじゃない決してなくて、長いまちづ

くりの歴史の積み上げがあるんですよ。

あそのまちづくりが始まったの、これも地震からスタートしてるんですけど、もう湯布院は壊滅だとかいうことを何とか払拭したい、風評、何ていうか、ああいうのから脱却したいということで映画祭やったり、音楽祭やったり、いろんなイベントをばんばか、ばんばかやらはったわけなんですけれども、湯布院のまちづくりってそっちのほうが目立ちちゃってるみたいなんですけど、実はそうじゃなくて、自分たちにとって大切なのは、このまちの将来にとって大切なのは何かというのを、これでもか、あれでもかということでずっと話し続けはったんですよ、いろんな人たちと。

実は10年前かな、うまくいくまちづくりと、つまりリーダーがある年齢で退いたとしてもずっと持続してるまち、元気なまちづくりってあるんですよ。でも、そのリーダーがいなくなると同時にすっと下火になるまちづくりもあるんです。この差って何やろうと疑問に思ったときに、湯布院はどうも元気やなということを知ったので、取材に行って、調査しに行ってわかったことがあるんですけど、行くと、もう70代の大ベテランから、20代、10代の子もいましたね。そういう人たちが口々に、それは出ごとやから、出ごとやからと言わはるんですよ。はあつと言ったら、出ごとと言ったら、農村世界では、とにかく出て行って、共同でする作業みたいなときは出て行って、とにかくどうしたらいい、こうしたらいいのとことん話すという、そういう文化が伝統的にあるみたいなんです。その伝統文化をまちづくりにうまく活用して、出ごとと称して、とにかく何かをするときにも、まちのここにサロンのようなところがあって、何かとにかく話してるんですよ、話して、話して、けんかもしてはりました。そういう光景が今でも焼きついてるんですが、やっぱりそういうふうな地道な何か普通のレベルの普通のことをずっと積み重ねてる中で、まちづくりスピリット、自分たちは何のためにまちづくりをするのか、何のためにこれを残したいのか、何のためにこれを伝えたいのかをやっぱり知らんうちに議論してはるんですよ。それが身の内に積もってってるんですよ。それが事が起こったときにも、やっぱり何が自分たちにとって大切かというアクションに移っていったらなという、そういう湯布院のまちづくりの継承のあり方というのを考えたときに、やはりこの世界遺産登録をめざしていくというときも、コミュニティーの役割と言ったときに、大上段に構えて言うというのも1つでしょうけれども、実はもっと身近なところから自分はこのふうな関心を持ってんねや、こういうことをやったらいいよねというふだんのやっぱり対話ですよ、そういう中で、この人、何考えてんねんやろう、これはいけるかもしれないというようなことをやっぱり積み重ねていくという、これも大切なことなんじゃないのかなと思いますね。

そういう中で、やっぱりこれ1つ大きなイベントとして立ち上げようかというようなことをやって、初めからこのイベントをしましょう、こういう取り組みをしましょうという項目からじゃなくて、やっぱり思いを共有するということから始めるということがさっきから

申し上げてる持続可能な姿勢というところとやっぱり結びついていくんだなという、これはもう湯布院のまちづくりを見てそう思いました。全然へこたれてません、本当に目が生き生きとしてはりました。それは私、10年前の取材に行ったときのあの目とほとんど変わっていません。それだけやっぱり積み重ねるということの意味の大きさというのを感じます。

さっきから言ってる共同ということになりますけれども、共同は組織同士でやることではありません。堺市、藤井寺市、羽曳野市という自治体という、そういう組織がやっていくことではなくて、そこにいるいろんな個人が動き出すということだと思えます。そしたら、個人が、じゃあ共同というのは力を合わせるわけでしょう、力を合わせて1つのことをやっていこうとしていくわけなんだから、その力をどれだけ自分たちが持っているのかということを知らないといけませんよね。結局、自分のことを自分が知ってないと、自分はどんな思いでどういうことをしたいのかということ、まずそこからスタートしないと、一緒にやっていくにも、ただ何かわっとじゃもったいないですよ。

そういう意味で、きょう何回か言いました、問いかけの2というのは自分が歴史・文化に対してどういうふうに、どんな存在ですかというふうに聞きましたけど、これはやっぱり歴史・文化に対する皆さんのまなざしのあり方です。それから、自分自身の思いとか問題意識、そういうものを確認するために、何を伝えたいですかということと言いました。練り切れてない、大切なものはわかってる。でも、まだちょっときょう伺った感じでは、まだ自分の中で練り切れてらっしゃらないんじゃないのかなという気がしました。もう一度、自分がイメージされた言葉を自分に問いかけて、本当にその中でも一体何を伝えたいんだろうということとやっぱり考えていっていただけたらなというふうに思いますし、そういう中で皆さんと一緒に進めていっていただけたらなというふうに思います。

これは当たり前のことなんです。きょう、この研修会の講師のお話をいただいたときに、説明に来てくださった至田さんという方が、こういう仕事をすることによって初めて自分の身の回りの歴史・文化というのを見るようになりました。と同時に、小さいころにそういえば夏休みの宿題にお父さんに古墳連れて行ってもろたと、そういう話をしてくださったんですよ。それはすごく印象に残ってるんですよ。何かそれまで余りお父さんと、そういうところ、いつも行ってたかといったらそうでもなく、何か知らんけど一緒に行こうということになって行かれた。それがふつとよみがえってきたという。それは小さいころの記憶やね、思い出やねで済ませたらそれまでかきませんけれども、それが大切やと思えます。じゃあ、古墳を知るためにというまち歩きにしろ、イベントにしろ、それはもうやり方はいっぱいありますし、いろんなところがやっています。でも、一味違う何かを見出すにはその記憶なんです。そのときのお父さんと一緒に歩いたという、その感覚、そういったものがこんなふうにしたら今の子どもにも伝わるかな、おもしろがるかなということにつながっていくんじゃないのかなと。

これは私は肉ジャガをつくることと同じだと思っています。肉ジャガはレシピとしてはどこにでもある、ありきたりのものです。だけれども、その人その人の舌の記憶によって、お母ちゃんがつくってくれたのはこんなやっとなとか、あっこで食べたん、こんなおいしかったなというので、みんなそれぞれに工夫をします。すると、それぞれの肉ジャガ、その人でないにつくることのできない肉ジャガに変わっていくと思います。肉ジャガという当たり前のものが当たり前じゃなくなるということになると思うんです。

ですので、これからそういう皆さんがお一人お一人がそういうものを持っていらっしゃる方々であるということのを再認識していただいた上で、ぜひこの3市だからこそできる継承のあり方、継承の仕組みというものをやっぱりこれからつくり上げていっていただけたらなというふうに思います。

ちょっとありきたりな話だったかもしれませんが、何かこれから取り組まれていくときの何かのきっかけになったらなというふうに思いまして、これで研修を終わらせていただきます。ありがとうございました。（拍手）

○松村尚子羽曳野市議会議長 足立様、本日は大変貴重な研修をいただきまして、本当にありがとうございました。本日の研修をきっかけに何を伝えていくのか、何を継承していくのかということのを改めて考える機会を設けさせていただきました。そして、これからも百舌鳥・古市古墳群の世界文化遺産登録の実現に向けまして、私たちが歴史の1ページを築いていく、そんな思いで議会として、また議員としての役割を皆さんとともに果たしてまいりたいと思っております。

それでは、感謝の意を込めまして、足立様にいま一度、盛大な拍手をお願いいたします。
(拍手)

どうもありがとうございました。

それでは最後に、研修会の終了に当たりまして、清久藤井寺市議会議長より御挨拶をいただきます。よろしくをお願いいたします。

○清久功藤井寺市議会議長 皆さん、改めましてこんにちは。御紹介いただきました藤井寺市議会議長の清久功でございます。

本日はお忙しい中を多数お集まりいただきまして、ありがとうございます。

また、今回御講演をいただきました足立久美子様につきましては、御多用の中お越しいただきまして本当にありがとうございます。非常に中身の濃い講演をしていただき、本当に感謝いたしております。

私ごとではございますが、この百舌鳥・古市古墳群につきましては、幼いころから見なれた風景であり、余りにも身近にあるがゆえに、逆に古墳群の持つ文化遺産としての価値の大きさに気づかないところもございました。今回の研修会を通じまして古墳群の持つ文化遺産としての価値観を再認識させていただくとともに、こうした文化遺産があるまちに住める喜びを改めて感じておるところでございます。

この古墳群のすばらしさを日本のみならず、世界の方々にも知っていただきたいという気持ちでいっぱいでございます。この講演会を生かさせていただいて、3市市議会議員の皆様と力を合わせまして、百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録に向けてなお一層、頑張ってまいりたいと考えております。

改めまして、本日御講演いただきました足立様に御礼を申し上げまして、閉会の御挨拶とさせていただきます。本日はまことにありがとうございました。(拍手)

○松村尚子羽曳野市議会議長 ありがとうございました。

それでは、ここで足立様が御退席されますので、皆様におかれましてはいま一度、盛大な拍手でお送りいただきたいと思います。足立様、どうもありがとうございました。(拍手)

それでは、以上をもちまして、堺市・羽曳野市・藤井寺市3市議会合同議員研修会を閉会とさせていただきます。

○午後4時33分閉会